「自分の読者が世界にいる」という喜び。

作家・田口ランディ 民主化すすむルーマニア紀行

コミックをはじめとした日本の出版物が海外に受け入れられつつあるなか、オリジナリティのある海外展開を自らの意志で進める作家の一人に田口ランディ氏がいる。自著の翻訳出版を記念し、昨年のイタリアにつづいて、今年六月にはルーマニアを訪問した。チャウシェスク独裁政権が打倒されてから一八年、言論・表現の自由を徐々に獲得してきた国は、田口氏の眼にどう映ったか？

（編集部）

田口ランディ氏は1959年生まれ。2000年に長編小説『コンセント』（幻冬舎）を上梓し小説家デビュー。他にもノンフィクション、エッセイなど著作多数。01年『できればムカつかずに生きたい』（晶文社）で第1回婦人公論文芸賞。公式ブログ＝http://rundy.exblog.jp/

ルーマニア滞在中は、記者会見、メディア各社の取材、テレビ出演、サイン会などを精力的にこなした。いずれも和服姿でアピール。

六月四日から一〇日まで、ルーマニアの首都、ブカレストで行われるブックフェアに参加してきた。今回、ルーマニアの新興の出版社「クオリティ・ブックス」が私の小説『コンセント』を翻訳出版。そのプロモーションのためにルーマニアに招待されたのだ。

最初、ルーマニアからの出版のオファーが来たとき、「なぜルーマニア？」と思った。正直なところ私が思い描いているルーマニアのイメージは、独裁者チャウシェスクの圧政に苦しんだ貧しい国、だった。ヨーロッパの社会主義圏にはほとんど縁がなかったが、興味はあったので出版契約を結ぶことにした。なにより、出版社が大変熱心だったのだ。わざわざ日本から作家を招待するにはお金もかかる。ルーマニアの読書人口を考えても、これはかなり冒険的な先行投資ではないか。どうしてそこまで私の本を気に入ってくれたのか、担当編集者に会って聞いてみたかった。

ブカレストに到着すると、出迎えてくれたのは敏腕編集者のアリーナだった。年齢は三〇代。彼女はルーマニアの大手出版社三社で働いた経歴をもつ。この国では転職はマイナスではない。転職するたびにキャリアアップと考えられているから、アリーナの経歴は編集者の花道と言えるだろう。しかし、彼女は保守的な大手出版社の編集姿勢に飽き足らず、さらに転職。まったく新しいタイプの新興の出版社である「クオリティ・ブックス」に創業から参加したのだ。

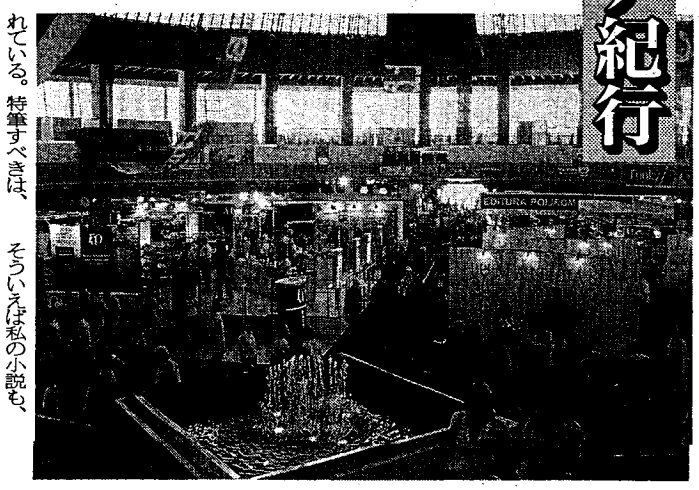
この出版社の社長は、まだ四〇代の青年実業家。彼はエンジニアだったが、チャウシェスク政権が崩壊する革命当時にメディアに転職し、雑誌記者や新聞記者を経て、自分でリベラルな新聞社を立ち上げる。と、同時に新聞販売のスタンドも全国展開で経営し、いまや一躍ルーマニアの若きメディア王といった感じだ。そして、二〇〇六年二月に、出版界に新風を送り込むべく「クオリティ・ブックス」を立ち上げたのである。

娼婦コンビ？で記者会見

翌日には、もう記者会見が設定されていた。会場は銀行がアンテナショップとして経営している、かなりおしゃれな力フェである。入っていくと着物姿のキャンペーンガールまでいた。テレビ局が三社と、ブカレストの大手新聞社の文芸担当の記者が集められていた。

私といっしょに、今回のブックフェアに招待されていたのはアメリカ人作家のジャネット・エンジェル。ジャネットは、神学、文化人類学などの博士号を四つも取得し、アメリカの超有名大学で教えていたインテリで、『コールガール』という小説を書いてデビューしたのだ。この本は『コールガール　私は大学教師、そして売春婦』（筑摩書房）として日本でも翻訳出版されている。特筆すべきは、これはジャネットの実体験をもとにして書かれた本であること。アリーナが、新しい出版社で最初に出した翻訳本がこの『コール・ガール』であり、今回は二作目出版にあたって初めてジャネットをルーマニアに招待したのだそうだ。

そういえば私の小説も、ラストで主人公が娼婦まがいのことをする。なるほど、今回は「娼婦コンビ」なのかと納得した。いったい、私たちをルーマニアの新聞がどう報道するのか、まあ、確かに宣伝としては「娼婦を描く外人女流作家」はセンセーショナルかもしれない。



ブカレスト・ブックフェスタの会場

自分で探した エージェント

私は自分が海外で自著を出版したいと望み、自分でエージェントを探した。

特に海外で売れているわけでもないので、自分から売り込みをかけなければヨーロッパの海外出版など叶わなかったろうし、また、トランネットの近谷さんにお願いしなければ、直接に海外の編集者たちと交流し、自分の本の装丁も含めて意見を交換することなどありえなかったろうと思う。イタリア語出版に関しては、翻訳者が気に入らずに変更してもらった。ここまで、自分の意志を通せるようになったのは、よいエージェントのサポートのおかげだと本当に感謝している。あとはなんとか海外でベストセラーになって、エージェントや出版社に恩返しをしたいのだが、これはもう私の力の及ぶところではなく、情けないが神頼みの状態である。それでも、翻訳者や海外の担当編集者と気心が知れているのは頼もしく、これから出る新刊に関してもぜひ、海外で出版できるものならしていきたいと思っている。

なぜ、海外で出版したいのですか？

と、よく聞かれる。日本の作家で自分から海外出版に積極的な人はあまりいないからだろう。なぜと聞かれても、面白いからとしか答えようがない。たとえばルーマニアでは、三つのテレビ番組にゲスト出演した。そして、ルーマニアのみのもんたのような人気タレントや人気キャスターと会って、日本に関する質問を受けるのだが、やはり、微妙なところで日本とルーマニアは違う。日本がどう見られているのか、同時に、私がルーマニアをどう誤解しているのか。手触りでわかるのだ。めったに海外に行かない私にとって、海外出版で触れる海外事情はたいへんな刺激なのである。

日本人作家 初のサイン会

ルーマニアのブックフェアでは、テレビで私を観た読者の方が本を買いに来てくれていた。あんがいと年配の男性が多い。一人の男性は三冊も同時購入。そんなにどうするの？と聞いたら、友達に配るとのこと。

「がんばんなよ、あんたがノーベル賞を取れるように応援してるよ」そう言い残して去って行った。ノーベル賞？　思わず笑ってしまった。日本でならせいぜい直木賞だろうが、ヨーロッパではノーベル賞である。冗談にしても威勢がいい。それにしてもあの男性は、私の本を読んでどんな感想をもつのだろうか。

プレゼントをもって来てくれた、おじいさんもいた。七〇歳くらいだろうか。本に筆ペンでサインすると、ニコニコしていた。たぶん、私はルーマニアでサイン会をした初めての日本人作家だと思う。光栄である。

※ルーマニアの人口は約二二〇〇万人（首都ブカレストは約二〇〇万人）。二〇〇〇年には経済危機に陥ったが、ここ三年は持ち直し、本の購買も増加傾向にあるという。出版統計の公式的データは乏しいが、以下に関係者の話をまとめた。

二〇〇六年は翻訳書、海外言語の本なども含めて約二万点の書籍が刊行、書籍だけで約一億ユーロ（一五〇億円超）が販売された。今年のブックフェスタに出展した約二〇〇社は、ほぼ毎月、新刊を刊行する。書籍より雑誌の出版が活発で、国の監査を受けたタイトルが約二〇〇、実勢はこれを上回り、スタンドで世界各国の雑誌が買える点では東欧一という。書店数は約一〇〇〇店、最大手チェーンは約七〇店舗を展開しているが、委託制のうえに支払いの滞りがちな書店が大半で、書店が一軒もない町も多いなど、まだ発展途上の段階にある。

〝性的タブー〟と闘う女性編集者

二次世界大戦が終わってから、ルーマニアは旧ソ連の脅威から共産主義の道を選ぶ。一九六五年、悪名高き独裁者チャウシェスクが共産党の第一書記に就任。チャウシェスクは旧ソ連のプラハ侵攻に反対を表明するなど、反ソ的な態度を見せたため西側諸国から評価され、アメリカやフランスの大統領が相次いでルーマニアを訪問、チャウシェスクと会見した。その頃から、チャウシェスクはおかしくなった。彼はもともと誇大妄想の兆候があり、先進国のトップが自分に会いに来たものだから、オレはすごいんだと思い込んでしまったのだ。そして、決定的に狂ったのは、北朝鮮を訪問してからだ。

キム・イルソンと会って、すっかり意気投合。自分もああいう個人崇拝の国家を作りたいと願い、北朝鮮から戻ると徐々に独裁国家を作り始める。古い建物を壊し、北朝鮮のような広い道路を作った。大きな銅像や、いかにも北朝鮮的な無機質なビルが建った。情報統制がしかれて、テレビは一日二時間。それも、北朝鮮の番組ばかり放送された。悪名高き独裁政権の誕生である。

一九八九年にチャウシェスクは革命によって銃殺される。そこからやっと、ルーマニアの民主化が始まったわけだ。

いま、ブカレストの街もその近郊も、工事中だらけ。高速道路が作られ、ビルが建てられ、やたらとほこりっぽい。きっと五年後に訪れたらまるで違う様子になっているのだろう。

経済が自由化されて、社会主義から民主主義に移行している国の人々が、一番幸せそうに見える。なにより、活気がある。どん底を経験して上向きに転じたときの晴れ晴れとした感じ。それがルーマニアに溢れていた。

そんななかで、アリーナのような優秀な編集者が、もっと自由に本を作りたい、これまでとは違う内容の本を出版したいと思うのは当然である。特に、アリーナはルーマニアの女性たちが急速に自由になっているのに、その反面でルーマニア正教によって刻み込まれてきた性的なタブーは依然として存在することに疑問をもっていた。

「ルーマニアは、女性の性的な問題に関してダブルスタンダードができている。実際には娼婦は存在するのに、そのことに目をつぶっている。女性の意識の解放が遅れていると思う」

実はアリーナは、実に敬虔なルーマニア正教の信者である。でも、彼女は宗教の本質を自分自身に問うていく知性と自律性があり、とても共感できた。確かに、彼女の説明を聞くとルーマニア正教は、カソリックとは違う。ルーマニアの土着な信仰と結びついた独特の宗教であり、どこかで日本古来のアニミズムとも通底するものがあるように思えた。だから、アリーナは私の小説に惹かれたのかもしれない。

「サインするだけ」の翻訳出版に不満

海外出版で、現地を訪れて海外の編集者と交流するのは、イタリアに続いてこれで二度目だ。

いままでも、中国や韓国や台湾、インドネシアなどでは翻訳本が出版されていたけれど、ちっとも売れなかったし、それに一方的に契約書が送られてきて私はサインするだけ。しばらくしてから見本が送られて来るのだけれど、その装丁がかなり悪趣味だったりすることもしばしば。第一、翻訳が上手いのか下手なのか、原本に正確なのかすらもわからない。こんなに粗雑に自分の作品が扱われるのはとても不満だったので、アジアでの翻訳は断わるようになった。

できれば海外の出版社ともっと親密におつきあいがしたい。私の本を編集してくれる海外の編集者と会って話がしたかった。なにより、翻訳に関してきちんとアドバイスをしてくれるエージェントが必要だった。そんな時に紹介されたのが、トランネットという会社だった。トランネットはもともと翻訳業の会社なので、翻訳の出来を確かめる点ではまったく安心だったし、なにより担当者の近谷さんが英語に堪能で、海外の編集者との間に立って懇切ていねいに作家と出版社を結びつけてくれたのがうれしかった。

昨年はイタリアでの出版が実現し、近谷さんといっしょにイタリアでのプロモーション活動を行った。その様子は本紙でも紹介されたと思う（2006年11月16日号）。イタリアの翻訳者、編集者たちとも、日本の編集者と同じようにおつきあいし、気持ちが通い合い、とても励みになった。世界に自分の読者がいることの喜びを初めて知った。純粋にうれしかった。同時に、多数のイタリア人ジャーナリストや作家の方と対談する機会をもち、日本が世界からどのように見られているのかをさまざまな角度から体験した。こんな実感は日本で執筆活動をしていてはとても得ることができない。また、観光旅行で海外に来てもわからない。作家として他国のジャーナリストと会えたことは、自分の視野を広げるのにほんとうに役に立ったし、正直、初めて「日本人であること」を意識して発言し、それによって自分の考え方も変わっていった。